

# 声明資料における補助記号「火」について

——音楽譜における言語事象の現れの一例として——

浅田健太郎

## 目次

はじめに

一、節博士付属の「火」

二、漢字と漢字の間に付される「火」

三、和語の場合

おわりに

## はじめに

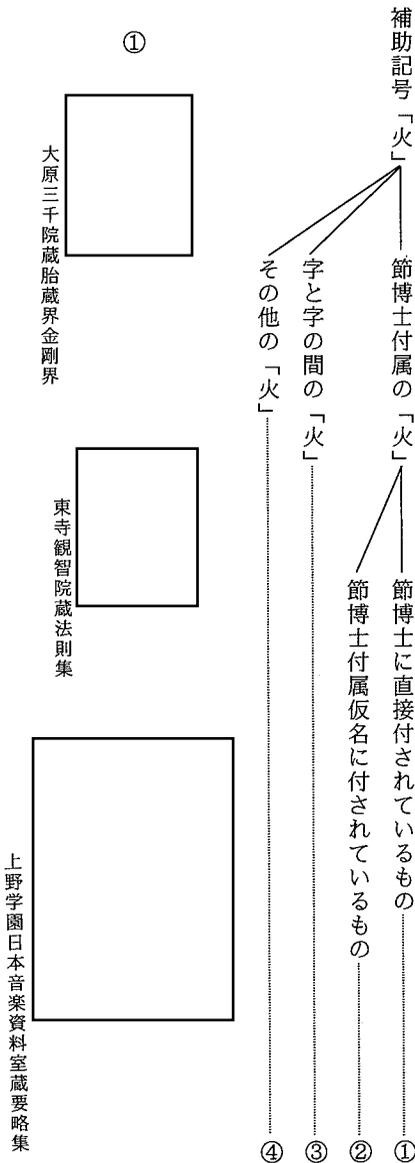
声明譜の本来の性質は音楽を忠実に視覚化する事に有る。従って言語資料としては特殊なものと思われがちであるが、その中にも言語性を反映している表記事象が混在している。声明資料には様々な補助記号による注記が用いられるが、それらは音声を視覚化するための工夫であり、節博士と共に声明譜を構成する重要な要素である。それらの補助記号の内「火」は長短記号とされ、<sup>(1)</sup>音楽にとつて重要な音の長さを指定する機能を有している。しかしながら、このように音楽的機能として重要な記号さえも、声明が言語と関わっている以上、言語と無関係ではない。本稿では補助記号「火」

声明資料における補助記号「火」について

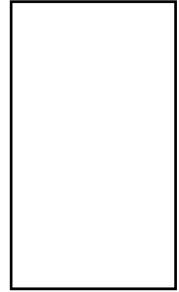
が音楽性のみならず言語性をも反映している事を、実際の声明譜から用例を提示する事によって指摘してみたい。

日本古典音楽の譜には広く補助記号「火」が用いられており、例えば箏譜の藤原師長撰『仁智要録』<sup>(2)</sup>では「火」を「絃移之間／火急也」とする記述が有る。すなわち、ある音と音の間を速く（火急に）移動する事が「火」の音楽的符号としての機能であると規定出来る。金田一春彦博士は国語学的見地から、そのような音楽的符号が「無声化のしるし」である可能性を示唆している。<sup>(3)</sup>また金井氏は実際にそれを実証されているが、それは和語の場合であり、字音の場合は論じられていない。そこで本稿では、声明譜という人間の音声を文字上に痕跡化するという試みの中で、補助記号「火」がいかなる要因によって付されているかを字音の場合を中心に観察し、その記号の本質を明らかにする事を目的とする。

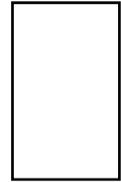
さて、声明譜に見られる「火」を観察した所、その用例は次のように分類出来る事が明らかとなった。影印と共に次に載せる。<sup>(5)</sup>



②



大原三千院蔵九条錫杖

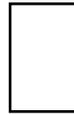


大原三千院蔵戒讚歎并訓伽陀

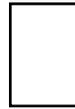
③



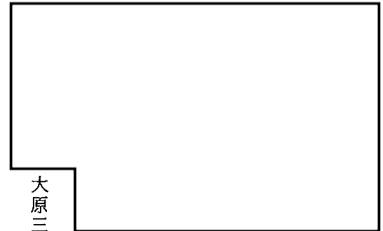
大原三千院蔵慈恵大師供次第



大原来迎院如来蔵懺悔誦誂文



覚如版法華懺法

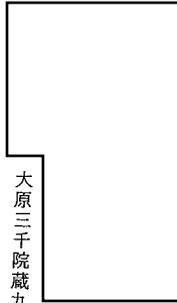


大原三千院蔵修正唱礼

④



大原三千院蔵九条錫杖



大原三千院蔵九条錫杖

以下では、節博士付属の「火」(①②)、字間の「火」(③)を中心に、それぞれについて時代毎に考察する。

一、節博士付属の「火」

ここで扱う節博士付属の「火」とは、本文の漢字で表される首の節を示している節博士の上或いは下に「火」の注記  
声明資料における補助記号「火」について

が為されているものを指す。

まず、鎌倉時代写の資料の用例を挙げる。「火」が付される節博士が存する字に傍線を引く。また、括弧内は曲目。尚、漢字間の合符は省略した。

三千院蔵九條錫杖（鎌倉時代文永七年（一二七〇）写、天台系）

（九條錫杖）錫杖 一切 俗く 毒獸 毒蟲 畜生 速得 或癡

（佛名）界會 撰受 大衆

本資料では、節博士そのものに付される「火」は少なく（「一切」のみ）、他は節博士に付属している仮名に更に付随している（前頁②参照）。更に、これらは節博士の終着点に配置される仮名に付されているものがほとんどである（例外は「俗く」「毒獸」「毒蟲」。終着点に配置される節博士付属仮名は途中に配置されるものとの対比上、母音の響きを持たない入声音か、促音と考えられる。そのような性質を有す節博士付属仮名に多く「火」が付されるのは、その節博士付属仮名を短く、母音を発声せずに唱える事を示していると思われる。

右の例では、節博士付属仮名は「ク」（「錫杖」「俗く」「毒獸」「毒蟲」「畜生」「速得」「或癡」）、「フ」（「撰受」）、「イ」（「界會」「大衆」）であり、「イ」以外は入声韻尾字に付いている。節博士付属仮名が終着点に配置されているという事は当該漢字が入声音或いは促音で読まれる事を示している事から、これら「ク」「フ」に付してある「火」の例は入声音・促音を指していると考えられる。更に、入声字の内促音化の環境に有るのは「フ」の「撰受」のみで、他は促音化の環境に無い。従って「火」が付してある節博士付属仮名「ク」は入声音を指している可能性が高い。

因みに舌内入声字（節博士付属仮名「ツ」が付されているもの）は見当たらない。また右の「ク」「フ」の例は終着点

に配置されている事で既に促音・入声音である事は明らかであるのにも関わらず、猶「火」を付してあるという事に関しては、音韻として入声音の位置が関連しているのではないかと考えられる。すなわち、それぞれの仮名「ツ」「ク」「フ」で統合される音韻的範疇が、「ツ」の場合は促音・入声音をも含むものであったのに対して、「ク」は促音・入声音を、「フ」は促音を、それぞれ厳密には含んでいないという当時の意識が、そこに現れているのではないかと想像出来る。つまり、単独の仮名が入声音・促音を示す事が出来る「ツ」の場合は、わざわざ「火」を付す必要が無く、逆に入声音或いは促音を示す事が出来ない「ク」「フ」の場合は短音記号である「火」を付す事によつてそれを示したと考えられる。

また、「界會」「大衆」の二例は節博士付属仮名「イ」に付されている。この事から、「火」は純粹に入声音や促音を示すのでなく、単に指定された音を短く或いは子音のみで発声する事を示していると見る事が出来る。

以上のように、本資料では多くの「火」が入声韻尾を示す節博士付属仮名「ク」「フ」に付してあり、しかもその節博士付属仮名は節博士の終着点に付してある入声韻尾を指している。本資料における「火」は言語的な要因（具体的には促音や入声音）で用いられている事が多いと言える。但しそれが全てではなく、入声韻尾以外のものにも用いられているので、必ず促音・入声音を示す訳ではなく、音楽的な長短を示す機能を果たす中で、言語的な要因が音の長短に介入し、結果として促音・入声音を示す事が有ると考えられる。この傾向は次に示す資料では更に顕著である。

金沢文庫蔵秘讚類聚集（鎌倉時代延慶二年（一一三〇九）写、真言系）

（緊那羅天讚）駄南

金沢文庫蔵貳捌尊唐音讚（鎌倉時代延慶二年（一一三〇九）写、真言系）

（薩）大心

（法）善利

東寺藏法則集（鎌倉時代元徳二年（一二三〇）写、天台系）

（五悔）勝妙 勸合 諸有 所生 所懺 歡喜 福智 隨喜 不失 不獻 八難 族眷 金剛 悲毘  
（九方便）莫三 真實 法蜜 所積 身口 衆生 法心 法有 所住 悲毘 麼句 嚧婆

三千院藏戒讚歎并訓伽陀（鎌倉時代中期写、天台系）

（戒讚歎）惡趣

覺如版法華懺法<sup>⑧</sup>

（法華懺法）塔寶

金沢文庫藏聖宣本声明集（鎌倉時代写、天台系）

（梵唄）等 不思議 敬礼 供養

（三條錫杖）淨心 執持

（九條錫杖）滿願 菩提 波羅蜜 一切 怠者 戒者 發菩提 地獄 解脱 過去 現在

（毀形唄）毀形守 願度

（三礼）依佛

（梵唄）如来妙 色身 世間

（灌佛頌）徳庄

（御前頌）菩提 法身

（惣料簡章）不起

金沢文庫藏文保三年仮名曆紙背聲明集（鎌倉時代写、天台系）

（講師學經題様）南無 妙法

金沢文庫藏南山進流聲明集（鎌倉時代写、真言系）

（胎藏界）恭敬敬礼 復作 三|大

（梵音）十方 生|無

金沢文庫藏秘讚集（鎌倉時代写、真言系）

（又曰）迦|羅

（反音）都|扇

金沢文庫藏念誦（鎌倉時代写、真言系）

（佛眼）婆|唵 你|曳 你|曳 妬|烏 底|瑟

（不動）拏|摩 訶|路 万|多

（兩部）都|鏤 縛|曰 吽|欠 吽|欠 阿|尾 駄|都 吽|欠 尾|羅 都|鏤 吽|欠

（金輪）嚕|吽 嚕|吽

金沢文庫藏妙音天讚（鎌倉時代写、真言系）

三|曼 駄|南 蘇|羅 蘇|婆

金沢文庫藏供養贊（鎌倉時代写、真言系）

諸|莊 諸|莊

以上の資料における「火」の用例は、その殆どが入声韻尾字ではなく、入声字は「族眷」「法心」「福智」「八難」「莫三」「法有」「悪趣」「執持」「發菩提」「復作」「吽欠」に限られる。更に、「火」の節博士における位置に着目してみると、節博士の半ばに付されているものが殆どである。節博士の半ばに付されているという事は、節博士で示されている節の

中でその部分を短くする事であるから、入声音や促音とは無関係であると考えざるを得ない。従ってこれらの節博士半ばに付されている「火」は言語的な要因でなく、音楽的な要因で付されていると考えられる。但し、『東寺藏法則集』における「族眷」「法心」「福智」「莫三」は節博士の終着点に「火」が付してあり、これらは入声音或いは促音を示していると考えられる。

次に南北朝時代書写の資料に目を転じる。

三千院藏修正唱礼（南北朝時代写、天台系）

（梵唄）色身

隨心院藏聲明集（南北朝時代写、真言系）

（九條錫杖）淨心

（九條）灌師 一 躰 癡者

三千院藏胎藏界金剛界（南北朝時代写、天台系）

天等

理趣三昧法則（南北朝時代写、真言系）

金剛 万 境界 境界 命 一切

佛名會法則（南北朝時代写、真言系）

説 當願 眞際

南北朝時代の資料においても入声韻尾字に付される「火」は多くない。しかし「色身」の「火」は節博士の終着点に

配置される節博士付属仮名「キ」に付されているので喉内入声音を指していると思われる。また「一躰」は節博士の長さが短いのではつきりしないが、終着点よりに位置しているので、促音化を指していると考えて良からう。その他の例は入声字でなかったり、節博士の途中に配置されているので音楽的要因によるものである。

次は室町時代書写の資料の用例を挙げる。

上野学園蔵法華懺法（室町時代永享三年（一四三二）写、天台系）

（法華懺法）覺衆

上野学園蔵要略集（室町時代寛正三年（一四六二）写、真言系）

（云何唄）因縁

（散華）ン願 毘盧 盧 金剛 一乘 深 ン願 此功 此功 衆生 成佛

（對揚）三密 密教 證誠 誠密 威光 威光 光増 皆成 皆成 靈成 正覺 國家 豊樂 善願 受者 除災与

興隆 佛法 平等 利益 佛性 深妙 金剛 手 菩 金 手 菩

（具音三礼）帰依 佛 願 衆 願 衆 帰 法

（唄）与 盡 切

（四弘）無

（佛名）持

『要略集』においては、非常に頻繁に「火」の注記が用いられている。付されている字も入声字だけでなく様々な字に付されており、特徴は見出し得ない。という事は、それが音韻的、或いは言語的要因によって付されているのではな

く、音楽的要因によって付されている事を示唆する。

また、この資料においては長い節博士のどこに「火」が注記されているかが明確であるという特徴が有る(先掲影印の①を参照)。この事は唱える音のどの部分を短くするかという音楽的な要素を細かく指定してあるという事である。すなわち、「火」注記の基本的な性質は発声の短さを指定する事に有り、それが入声字に付される事により、言語的な要因が副次的に介入して入声音・促音を示す事になると言える。

以上節博士付属の「火」について観察した。総じて節博士付属の「火」は、音楽的要素が強く、単に指定する発声を短くする事を示している。それは真言系の資料では顕著であるが、天台系、特に『三千院蔵九條錫杖』では多くが入声字の節博士付属仮名に付されており、両者の「火」の性質が微妙に異なっている。すなわち、真言系では音楽的要因から「火」が付される事が多く、天台系では言語的要因から付される事が多い。但し天台においても入声字以外の字に付される事は珍しくないため、基本的には音楽的要因、つまり発声を短くする事を指定する記号であると言える。

しかしながら、節博士付属仮名に「火」が付してある場合は、殆どの節博士付属仮名は終着点に配置されており、入声音・促音を指している場合が多い。また「火」そのものが終着点に配置されている場合も、それが入声韻尾字である場合は入声音・促音を指している可能性が高い。すなわち、「火」は基本的には音楽的要因によって付されているものの、その性格を利用して言語的現象を視覚化する事に用いられていると考えられる。また時代による差異は明確でないが、強いて言えば古い、鎌倉時代の資料に言語的要因によって付された「火」が多いと言える。

## 二、漢字と漢字の間に付される「火」

次に漢字と漢字の間に付される「火」について論じる。先の節博士付属の「火」が一つの字について指定してある音程のそれぞれの部分に關しての注記であつたのに対して、漢字の間に付される「火」は、その形式から漢字と漢字、或いは漢字それぞれが示す発声と発声の關係を示していると思われる。次に時代毎に用例を示す（「火」の位置は資料によつて字間の左と右の両様があるが、特に使い分けが認められない為、便宜的に全て右側に付して示す）。

三千院藏九條錫杖（鎌倉時代文永七年（一二七〇）写、天台系）

（九條錫杖）那<sup>火</sup>く、一<sup>火</sup>く、逸<sup>火</sup>者

『九條錫杖』において特徴的なのは「一<sup>火</sup>く」において「一」の傍らに「サイ」と振仮名が付してある事である（「一<sup>火</sup>く」は恐らく加點者にとつて自明であると感じられた事による省略。「サイ」とあるので「切」か）。この事は「一切」を「サイ」と発声した事を指すのではないかと思われる。すなわち「火」によつて「一」の示す音が極端に短くなり、殆ど発声しない状態を指すと考えられる。因みに現行の真言声明においても、「急」という記号によつて該当字を殆ど発声しない事が有る。但しこの例は「火」が漢字と漢字の間というより先行字の「一」に偏つて配置されているため、例外と考へるべきであろう。しかし、その対象となる発声を短くするという「火」の基本的な性質が顯著に現れている。

因みにこの資料では、先に触れた「火」の分類の内、その他の「火」(④)に該当するものが現れる。これらは、振仮名に「火」が付されたもの（先掲影印④上）、他の記号と共に現れるもの（先掲影印④下）があるが、振仮名に付した「火」は<sup>10</sup>ずらし表記に付されており、入声音である事が窺われる。また他の記号と共に現れる「火」も前後の両字が密接な關係にある事を指しており、両字が示す音声を連続的にすばやく発声する事を指していると思われる。

三千院藏六種講演（鎌倉時代文永九年（一二七二）写、天台系）

（六種）陀羅尼

三千院藏戒讚歎次第（鎌倉時代永仁三年（一二九五）写、天台系）

至心 一切 虚空藏 等利益

三千院藏慈惠大師供次第（鎌倉時代写、天台系）

師聖

覺如版法華懺法（鎌倉時代写、天台系）

（法華懺法）十方 十方 法門 現前 如經 所說 亦復 法常 十方 十方 十方 證常樂

（七佛通戒偈）其意 是諸佛 聖衆

（後夜偈）無餘

（黃昏）無情

（初夜）無情

（九條錫杖）速證 一體 波羅 波羅 波羅 波羅 波羅 具修 受苦

金沢文庫藏聲明集抄覺意五音博士（鎌倉時代写、真言系）

（小懺悔）至心 成無上道

金沢文庫藏秘讚集（鎌倉時代写、真言系）

（文殊梵語）耶縛

金沢文庫藏北方天讚（鎌倉時代写、真言系）

室羅曼 支利

これらは「一<sup>火</sup>切」「十<sup>火</sup>方」「亦<sup>火</sup>復」「法<sup>火</sup>常」「速<sup>火</sup>證」「一<sup>火</sup>體」のみ入声字で、この内促音化する環境にあるのは「一切」「十方」「法常」「一體」である。これら入声字以外は音韻的規則性が見出せないので、「火」は音楽的な要因から先行字から後行字にすばやく移動し発声する事を示していると解釈出来る。従って喉内入声字の例は入声音を直接的に示しているというよりも、読誦音が入声音であったため聞き手がその発声の短さを「火」によって示そうとしたという結果的な側面が強いと思われる。またここでも天台系の資料には促音・入声音という言葉的な要素を反映した用例が多い事が指摘出来る。

次に南北朝時代写の用例を挙げる。

三千院藏懺悔誦読文（南北朝時代建武二年（一一三三—一一三五）写、天台系）

十<sup>火</sup>方 毘<sup>火</sup>盧 十<sup>火</sup>方 十<sup>火</sup>方

四例のみであるが、その内三例は「十<sup>火</sup>方」であり、促音化を示したものであろう。

三千院藏修正唱礼（南北朝時代写、天台系）

（供養文）一<sup>火</sup>切 一<sup>火</sup>切 遍<sup>火</sup>滿 十<sup>火</sup>方 一<sup>火</sup>切 一<sup>火</sup>切

（唄間唱云）波<sup>火</sup>羅<sup>火</sup>密<sup>火</sup>經

（佛号）過<sup>火</sup>現 未<sup>火</sup>來 空<sup>火</sup>界 一<sup>火</sup>切

（懺悔發願）帰<sup>火</sup>依 无<sup>火</sup>上 願<sup>火</sup>已<sup>火</sup>帰<sup>火</sup>命 一<sup>火</sup>切 普<sup>火</sup>念

(發願) 功<sub>火</sub>德 衆<sub>火</sub>生

「十方」「一切」は促音化例であろうが、他は音楽的要因によるものと思われる。

三千院藏胎藏界(南北朝時代写、天台系)

(灌中音・供養文) 遍<sub>火</sub>滿 十<sub>火</sub>方 一<sub>火</sub>切 一<sub>火</sub>切 恭<sub>火</sub>敬<sub>火</sub>礼 亦<sub>火</sub>如<sub>火</sub>是 盡<sub>火</sub>隨<sub>火</sub>喜 願<sub>火</sub>救<sub>火</sub>世<sub>火</sub>間 亦<sub>火</sub>如<sub>火</sub>是(胎藏界・四智讚梵語) 遍<sub>火</sub>滿 一<sub>火</sub>切 一<sub>火</sub>切(胎藏界・九方便) 恭<sub>火</sub>敬<sub>火</sub>礼 不<sub>火</sub>復<sub>火</sub>作 悉<sub>火</sub>正<sub>火</sub>歸<sub>火</sub>依 諸<sub>火</sub>如<sub>火</sub>來 諸<sub>火</sub>會<sub>火</sub>識 盡<sub>火</sub>隨<sub>火</sub>喜降<sub>火</sub>法<sub>火</sub>雨 淨<sub>火</sub>法<sub>火</sub>界<sub>火</sub>身 死<sub>火</sub>苦<sub>火</sub>至<sub>火</sub>菩<sub>火</sub>提

この資料においても入声字とそうでないものが混在しており、先行字と後行字の発音が緊密な関係にある事を指していると考えられる。右の諸例の内、胎藏界・九方便の例はいずれも末尾行から二行目の行末に現れる(末尾行は全ての方便で統一)。従って、最後の「廻向方便」の「死<sub>火</sub>苦<sub>火</sub>至<sub>火</sub>菩<sub>火</sub>提」を除けば、「恭<sub>火</sub>敬<sub>火</sub>礼」「不<sub>火</sub>復<sub>火</sub>作」「悉<sub>火</sub>正<sub>火</sub>歸<sub>火</sub>依」「諸<sub>火</sub>如<sub>火</sub>來」「諸<sub>火</sub>會<sub>火</sub>識」「盡<sub>火</sub>隨<sub>火</sub>喜」「降<sub>火</sub>法<sub>火</sub>雨」「淨<sub>火</sub>法<sub>火</sub>界<sub>火</sub>身」は、それぞれの方便の同じ位置において、統一された発声法で読誦されると考えられる。すなわち、方便の末尾行から二行目の行末は、音楽的に短く発生する事が統一されているのである。問題は、右の八例が三字の間に「火」が二つのものと四字の間に「火」が三つのものが存する事である。音楽的な定型部であるなら、全て三字或いは四字で統一されるべきにも関わらず、なぜ三字と四字の二種が存するのであるのか。恐らくこの問題は、四字の例「悉<sub>火</sub>正<sub>火</sub>歸<sub>火</sub>依」「淨<sub>火</sub>法<sub>火</sub>界<sub>火</sub>身」に含まれる「悉<sub>火</sub>正」「法界」が、それぞれ促音化の環境にある事と関連していると思われる。すなわち、促音化によって「悉<sub>火</sub>正」「法界」に挿入される「火」は言語的要因

による発声の緊密性の現れであり、それが音楽的要因によって発声を短くする部分に含まれる事により、その音楽的定型部自体が拡大したと考えられる。この事が示唆するのは、促音化という音韻的な要因が音楽的な要因に介入しているという事であり、「火」はそのどちらにも関与している事が窺われる。

三千院藏胎藏界金剛界（南北朝時代写、天台系）

（供養文）一火切 遍滿 十火方

（五悔）恭敬<sup>火</sup>礼 亦<sup>火</sup>如是 願<sup>火</sup>救<sup>火</sup>世<sup>火</sup>間 亦<sup>火</sup>如是

（對揚）金<sup>火</sup>剛

（供養文）一火切 一火切 一火切

（九方便）恭<sup>火</sup>敬<sup>火</sup>礼 不<sup>火</sup>復<sup>火</sup>作 悉<sup>火</sup>心<sup>火</sup>歸<sup>火</sup>依 諸<sup>火</sup>如<sup>火</sup>來 諸<sup>火</sup>含<sup>火</sup>識 盡<sup>火</sup>隨<sup>火</sup>喜

降<sup>火</sup>法<sup>火</sup>雨 淨<sup>火</sup>法<sup>火</sup>界<sup>火</sup>身 死<sup>火</sup>苦<sup>火</sup>至<sup>火</sup>菩<sup>火</sup>提

（佛讚）掘<sup>火</sup>也 地<sup>火</sup>也 尾<sup>火</sup>阿 鼻<sup>火</sup>夜

この資料においても同様に、「火」は先行字と後行字が発声として緊密な関係にある事を指していると考えられる。又本資料の九方便においても先の「三千院藏胎藏界」の（九方便）の例と全く同じ例が出現し、ここでも音韻的要因が音楽的要因に介入していると言えよう。更に、「掘也」「地也」「尾阿」「鼻夜」は振仮名がそれぞれ「掘也（チャ）」「地也（チャ）」「尾阿（ヒヤ）」「鼻夜（ヒヤ）」と付してある。これはすなわち、音訳部において、「火」の注記によって先行字と後行字の音を結合し、二つの漢字で一つの発音を示す事を指すと思われる。従って、本資料においても、「火」は音楽的要因のみならず、言語的要因により付されている事が確認出来る。

声明資料における補助記号「火」について

次に室町時代書写の資料における字間の「火」の用例を挙げる。

上野学園蔵要略集（室町時代寛正三年（一四六二）写、真言系）

（吳音三礼） 帰<sup>火</sup>依 衆<sup>火</sup>生 大<sup>火</sup>衆

上野学園蔵法華懺法（室町時代永享三年（一四三二）写、天台系）

（法華懺法） 敬<sup>火</sup>礼 十<sup>火</sup>方 十<sup>火</sup>方

（七佛通戒偈） 其<sup>火</sup>意 是<sup>火</sup>諸<sup>火</sup>佛

（半夜） 无<sup>火</sup>常

これらの資料では全て入声字以外で、先行字と後行字が発声として緊密な関係にある事を指していると考えられる。

以上漢字と漢字の間に存する「火」の用例を見てきた。ここでも節博士付属の「火」と同様に、音楽的な発声の長さを指定するために付されているものが多数を占める。促音化・入声音を示すものは、そのような音楽的な要因を利用して、「火」を入声字に使用する事により、副次的に促音化・入声音を示していると考えの方が妥当であろう。又、『三千院蔵胎藏界』『三千院蔵胎藏界金剛界』の（九方便）に見られた例のように音韻的な要因、すなわち促音が音楽的定型部に影響を及ぼす場合や、『三千院蔵胎藏界金剛界』の音訳部における「火」の用法のように二字で一音を示す為に用いられる場合も観察された。概して、「火」は基本的、本質的には音楽的短音記号であると規定できるが、言語的、音韻的要因で付されていると見られる例も多いと言える。

三、和語の場合

先引の金井氏は『四座講式』の版本を使って「火」について詳細に検討しているが、母音の無声化を起こす環境（狭い母音「i」「u」が無声子音に囲まれている場合）に「火」が付されているのは以下の割合であるという。

寛永十七年（一六四〇）版	——	二二例中八例（三八％）
明暦二年（一六五六）版	——	一九例中六例（三二％）
貞享三年（一六八六）版	——	五八例中五六例（九七％）
元禄十二年（一六九九）版	——	八例中六例（三二％）
宝暦（一七五九以後）版	——	一五例中五例（三三％）
大正五年（一九一六）版	——	三三例中二七例（八二％）

このようにかんがりの割合で無声化の起こる環境に「火」が付されている。本稿で使用した資料の中で和語が現れるものは少ないが、その中で「火」が付された用例を全て次に挙げる。

金沢文庫蔵聖宣本声明集（鎌倉時代写、天台系）

（舍利讚嘆）トヲキモロトモニ

（法華経讚嘆）ワカエシコトハ タキ、コリ

金沢文庫蔵聲明集文保三年仮名曆紙背（鎌倉時代写、天台系）

声明資料における補助記号「火」について

(舍利讚嘆) コト ヒジリノ

金沢文庫藏樂邦歌詠上(南北朝時代写、天台系)

(龔頭樂) イカニ

(甘州) コクラクノ 観ム アハレ

(郎君子) メテタキ メテタキ ウレシキ

(廻忽) トコロ

この内無声化の環境にあるのは「ワカエシコトハ」「ウレシキ」の二例のみである。従って直ちにこの二例が無声化を反映していると断定は出来ない。また管見に及んだ範囲では天台系の資料にしか見られないので真言系の資料を更に調査する必要がある。

### おわりに

本稿では補助記号「火」の用例を観察し、それがいかなる要因によって付されているかを検討してきた。声明譜はあくまで音楽の譜としての性格が強く、「火」の基本的な機能も指定された発声を短くするという音楽的な要請によって付されている事が多い。但し、そのような基本的機能を有す「火」は、言語的・音韻的要因が音の長短に介入し、結果として促音・入声音を示す事が有る。<sup>(1)</sup>

節博士付属の「火」は入声音・促音を示す節博士の終着点に配置された仮名に付随したり、「火」自身が節博士の終着点に配置される事によって入声音・促音を示す例が観察された。又漢字間の「火」も同じく、音楽的な定型部に促音化

という言語的要素が入り込んで、通常三字を短く発声すべき所を促音化を含んだ四字に亘って「火」が付されるという現象が見られる。すなわち、いかに音楽的な性格が強い声明譜といえども、音韻的、言語的な要素と無関係でなく、促音などの音韻的意識を反映せざるを得ない事を示唆していると言える。それは恐らく、「火」が現す音楽的長さはある程度絶対的な尺度で示す必要があり、そのような絶対的尺度を有す「火」が言語的な音の長さをも掬い取る形で声明譜に現れる事によると思われる。

#### 注

- (1) 岩原諦信『増補校訂 声明の研究』(東方出版、一九九七、二五五頁)において、長短記号として分類されている。
- (2) 福島和夫『楽蔵堂旧蔵の楽書解題目録』(上野学園日本音楽資料室、一九八七)
- (3) 金田一春彦『音韻史資料としての真言声明』(『国語学』第四十三輯、一九六一・二)
- (4) 金井英雄『母音無声化の史料としての声明』(『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一集』三省堂、一九八三)
- (5) 本稿で使用する資料の内、金沢文庫蔵のものは、神奈川県立金沢文庫編・著『金沢文庫資料全書 第七巻』(便利堂、一九八四)、同『金沢文庫資料全書 第八巻』(便利堂、一九八六)より、「要略集」は新井弘順「資料影印 要略集」(『東洋音楽研究』五〇、一九八六)より、またその他の資料は影印より利用、転載させて頂いた。
- (6) 拙稿「声明資料におけるずらし表記を巡って」(『訓点語と訓点資料』第一〇一輯、一九九八・九)
- (7) 「入声については、以前その残存の可能性を論じた事が有る。「声明譜において、節博士付属仮名によって室町時代中期まで喉内入声音の残存が確認出来る。」(前掲「声明資料におけるずらし表記を巡って」)
- (8) 刊記無し。天台系。但し仮名の字体などは先の『大原三千院蔵九条錫杖』と酷似しており、同じく鎌倉時代の資料として扱う。
- (9) 因みに「深」字の「火」には更に注記(「大二ハヤクスヘシ・ナカクモツハ甚タ非也」)がしてある。これは「火」が短く発声する事を指定するための記号である事を示している。
- (10) 通常の振仮名よりも字半分ほど右にずらしてある振仮名。促音・入声音を示し、現代表記の小書きの原形である可能性が指摘されている。(沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(第六部第五章「促音の小書き表記「ッ」の史的展開」、汲古書院、一九九七)、並びに前掲拙稿「声明資料におけるずらし表記を巡って」)

〔1〕因みに促音・入声音を示す用例は、和語の場合も含めて「火」の総数三八五例の内、約一五%にあたる五六例である。

〔付記〕

本稿は平成十年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会（平成十年八月十二日於広島大学）において発表した草稿に加筆し、修正を加えたものである。発表に際しては、諸先生方より貴重な御指摘、御意見を賜り、参考にさせて頂いた。記して謝意を表す。